骨癒著機轉ハ進歩シタルモノトミルヲ得ベシ。而シテ、讀者ハ、第七圖、第八圖ト日ヲ數ウルニ從ツテ益々骨折線ハ朦朧トナリ、下顎下緣骨折線端ヲ見ラルレバ分明スル如ク、下顎下緣ガ漸次原位ニ復シテ移動ナク、シカモ現在患者ハ食事、又ハ談話ノ際何等ノ不便ヲモ感ゼザルニ至レリ。サレドX線寫眞上、骨折線ノ全然消失スルノ狀態ハ向後ナホ之ヲ觀察セント欲ス。

昭和四年十二月四日於副手室脫稿

抄 錄

本號抄錄擔當者(イロハ順)

金 森 虎 男	川 上 政 雄
高 橋 新 次 郎	藤 田 恒 太 郎
鹽 谷 卓 爾	檜 山 健 兒

基礎醫學

敗血症及白血病患者ノ顎骨ニ於ケル組 織學的所見

Histologische Befunde im Kiefer bei Sepsis und Leukämie von Dr. Franz Schoenbauer, Wien (Aus dem histologischen Laboratorium; Leiter Doz. Dr. B. Gottlieb des zahnärztlichen Institutes der Wiener Universität
Zeitschrift für Stomatologie Heft 9, 1929)

敗血症又ハ白血病人ニ於ケルガ如ク、骨髓ニ病理的變化アルト共ニ、他ノ器官ニモ病竈ノ生ズル病氣ニテハ、齒牙ト顎骨骨髓トニ於ケル關係、即チ齒根膜及齒髓ガ如何云フ狀態ヲ呈シテ居ルカト云フ事ニ就テ、著者ハ剖檢ノ結果、確ニ、敗血症ト診斷セラレタ屍體

二例ノ顎骨ニ就キ、組織學的標本ヲ作りテ觀察シタ處ヲ左ノ如ク述ベテ居ル、敗血症ニテ斃レタルモノハ四十八歳ノ女性デ有ツテ、其ノ解剖所見ニ依レバ、化膿性股關節炎ガアリテ腸骨板上ニ膿瘍ヲ形成シ、骨盤膿瘍ガ膀胱ニ破レタルヲ認ム、尙ホ心臟ニハ實質性變質ガ生ジテ居タ。

此ノ年輩ニ成レバ、骨髓ハ普通、脂肪髓ノ狀態ヲ示スモノデアアルガ、此ノ場合ニ於テハ、骨髓腔ハ殆ンド完全ニ種々ノ形ヲシタル白血球デ充タサレ、其ノ間ニ所々脂肪細胞ガ散在シテ居ルモノモアレバ又他ノ骨髓腔デハ、白血球ノ密集ハ主トシテ、脈管周圍區域ニ限ラレテ居タモノモ見受ケタ。

故ニ、著者ハ此ノ所見ニ基キ、

此ノ脈管周圍ニ浸潤シタル細胞ハ組織内ニ生ジタルモノカ或ハ血管ヨリ遊走セシモノカノ二ツノ可能性ガ考ヘラレ、若シ後者トスレバ同様ノ所見ガ齒根膜ニモ齒髓ニモ有ルベキ筈デアルト云フ見地カラ、精細ニ之レ等ノ部分ニ就キ調ラベテ見タケレドモ、齒根膜及齒髓ニ於テハ何處ニモ、脈管周圍區域ノ細胞浸潤ハ認メル事が出来ナカッタ、只齒根膜ノ血管ガ太ク成ツテ居ルノヲ認メタルミデアル。

故ニ著者ハ骨髓腔ノ脈管周圍區域ニ細胞ノ浸潤ノ生ズルノハ其ノ周圍組織自身ニ作ラレルモノデアツテ血管ニ依ツテ有毒性產出物

ガ循環シ來ルタメニ組織内ニ起ル反應現象デアアルガ、此ノ事ガ骨髓内ノ脈管周圍區域ニ有ツテ、齒根膜及齒髓ニ認メラレナイ事實ハ之レ等ノ組織ハ反應力ガ僅少デアアル爲メニ歸スベキモノデアルト考ヘテ居ル。

白血病デ死亡シタモノハ八歳ノ男子デ、其ノ解剖所見ニヨルト、白血病ハ骨髓性ノ型デ、到ル處ノ淋巴腺ハ腫脹シ、心嚢内臓葉、心臟内膜、腎盂及心室筋ニ澤山ノ出血部ヲ認メタ。

顎骨ニ於ケル組織學的所見モ亦白血病ニ特有ナル所見ヲ認メ、骨髓内ニハ強度ノ細胞浸潤及ビ出血ガアツタ。

尙ホ齒髓ニハ潰瘍ガ生ジテ居タ。

此ノ例ニ於テモ亦、骨髓内ニハ強度ノ細胞増生ガアルニモ拘ハラズ、齒根膜ニ於テハ、白血球ノ存在ヲ認メ無カッタコトハ敗血症ノ場合ト同様ノ所見デアアル。

併シ乍ラ、此例ニ於テハ、齒芽ノ附近ノ齒根膜及ビ齒髓内ニ於テハ細胞ノ浸潤ヲ認メタガ、齒根膜ニ於ケルモノハ、主トシテ齒槽骨ニ接シタ凹窩部及齒根部ノ血管ニ富メル鬆粗性結締組織内ニ、之レヲ認メタ、又齒髓ニ於ケルモノハ[8]及[7]ノ齒芽内ニ細胞浸潤ヲ認メタルデアアルガ其他一般ニハ齒髓内ニハ細胞浸潤ガ無カッタ、著者ハ此レ等ノ齒芽ハ未ダ充分發育セヌ爲メニ、根端部ガ遙カニ廣ク明イテ居ルカラ、細胞浸潤ガ生ジタルモノト考ヘテ居ル。

結論トシテ著者ハ敗血症又ハ白血病ニ於テハ顎骨々髓内ニハ強度ノ異常ナル細胞増生ガアルニモ拘ハラズ、一般ニ齒根膜ニハ細胞ノ浸潤ガ無い、併シ乍ラ白血病ノ顎骨ニ於テハ、二ツノ齒芽ニ於テノミ、其ノ齒髓内ニ、白血病竈ヲ認ムルコトガ出來タト述ベテ居ル。

齒齦裂隙

The Gingival Crevice. By Balint Orban & Emil Mil-

ler. J. A. D. A. July, 1929.

千九百二十一年ニゴットリープ氏ガ (Deutsch. Monatschr. f. Zahnheilkunde) ニ發表セル論文ニ依レバ從來幾多ノ組織學者ニ依リテ唱導セラレタ齒頸部ニ於ケル軟組織ト硬組織トノ關係ニ關スル學說ハ誤謬デアルコトガ實證セラレタノデアル。

即チ從來ノ學說ニ依レバ第一圖左方ニ示スヤウニ a ガ遊離齒齦 b ガ齒齦裂隙 c ガ齒齦線デアツテ此ノ圖ノ如ク遊離齒齦ハ齒牙硬組織 (即チ珐瑯質又ハ白堊質) ト直接有機的結合ヲ營ムコトナク其ノ下端 c ニ於テ始メテ其ノ上皮組織ガ硬組織ト結合シテタルモノデアルト説明セラレテ居ツタ。然ルニゴットリープ氏ノ研究ニ依レバ第一圖左方ノ如キコトハ全ク觀察ノ誤謬デアツテ第一圖右方ノ如キガ實際ノ狀態デアルト論ジテタル。即チ b ノ如キ齒齦裂隙ハ存在シナイノデアツテ齒齦上皮組織ハ珐瑯質ト B ノ如ク有機的ノ

第一圖

結合ヲ營ンデヲツテ C ハ上皮組織ノ硬組織ト結合セル最深部デアル。此ノ新學說ハヨーロッパ中特ニドイツ、オーストリアニ於テハ一般ニ認承セラレテタルノデアル。其ノ主要ナル點ヲ舉グレバ、

(一) 從來ブラック氏 (アメリカ) 等ニ依リテ遊離齒齦ニ依リテ被覆セラレ齶蝕ニ對スル保護作用ヲ受ケテタルト思考セラレテヲツタ部分ハ齒齦裂隙デハナク明ニ上皮組織ガ硬組織ト結合シテタル部分デアル。

(二) 上皮組織ノ結合 (Epithelial attachment) ト齒牙ノ表面トハ共ニ發育スルモノデ此ノ部分ニ於テ齒牙ハ口腔ニ露出シテヲライナイノデアル。

(三) 齒齦裂隙ノ最深部ハ口腔内ニ於テ最モ不潔ナル場所デアツテ石灰性沈著物、破壊セル上皮細胞、白血球又ハ細菌膜ニ依リテ充サレテタル。

(四) 齒齦裂隙ガ淺クレバ淺イホド不潔ニナル機會ハ少ナイノアルガ常ニ多少ノ沈著物が存在シテタルノデアル。故ニ口腔清掃ノ目的、